

研究プロジェクト成果報告書（一般研究）

研究課題

教科教育カリキュラム構想のための基礎的研究

－「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」と教科固有の見方・考え方の観点から－

研究期間

平成28年度～平成29年度

渡部洋一郎	人文・社会教育学系・教授（国語）	国語科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
迎 勝彦	人文・社会教育学系・准教授（国語）	〃
大場浩正	人文・社会教育学系・教授（英語）	英語科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
長谷川佑介	人文・社会教育学系・講師（英語）	〃
志村 喬	人文・社会教育学系・教授（社会）	社会科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
茨木智志	人文・社会教育学系・教授（社会）	〃
中平一義	人文・社会教育学系・准教授（社会）	〃
伊達文治	自然・生活教育学系・教授（数学）	数学科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
高橋 等	自然・生活教育学系・教授（数学）	〃
宮川 健	自然・生活教育学系・准教授（数学）	〃
小林辰至	自然・生活教育学系・教授（理科）	研究の総括
稲田結美	自然・生活教育学系・講師（理科）	理科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
時得紀子	芸術・体育教育学系・教授（音楽）	音楽科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
尾崎祐司	芸術・体育教育学系・准教授（音楽）	〃
阿部靖子	芸術・体育教育学系・教授（美術）	美術科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
五十嵐史帆	芸術・体育教育学系・准教授（美術）	〃
土田了輔	芸術・体育教育学系・教授（体育）	体育科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
周東和好	芸術・体育教育学系・教授（体育）	〃
山崎貞登	自然・生活教育学系・教授（技術）	技術科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
東原貴志	自然・生活教育学系・准教授（技術）	〃
得丸定子	自然・生活教育学系・教授（家庭）	家庭科におけるカリキュラム構想と教科横断的研究
佐藤ゆかり	自然・生活教育学系・准教授（家庭）	〃
小高さほみ	自然・生活教育学系・教授（家庭）	〃

研究プロジェクトの概要

【背景】

本学は第3期中期計画・中期目標において、「人格に優れ、問題解決の力を備えた持続可能な社会を創造する人材を育成できる、世界最高水準の初等中等教育教員の養成を行う大学を目指す」としている。そして、「基礎力・思考力・実践力で構成される『21世紀を生き抜くための能力（汎用的能力）』を備え、かつ児童生徒に対しその能力を育成できる教員を養成する」としている。

一方、中央教育審議会教育課程部会では、次期学習指導要領の改訂に向けて、各教科等を学ぶ意義を明確化するため、各教科等において身に付ける資質・能力について整理を行っている。これらの資質・能力の育成のために中核的な役割を果たすのが、各教科等の本質に根ざした「見方・考え方」であるとしている。そして、「見方・考え方」とは、「様々な事象を捉える各教科等ならではの視点」と「各教科等ならではの思考の枠組み」であるとしている。

本学では平成27年度において、各教科等における「21世紀を生き抜くための能力（汎用的能力）」の思考力のとらえ方について検討し、報告書として発行している。次期学習指導要領改訂の理念と枠組みが明らかになりつつある現在、本学学部の教育課程の再構築に関する課題は、「21世紀を生き抜くための能力（汎用的能力）」の思考力と中教審の「様々な事象を捉える各教科等ならではの視点」・「各教科等ならではの思考の枠組み」を整合させるとともに、教科横断的に事象を捉える教育課程を構築する理念の検討と確立を目指すことである。

【目的】

平成27年度に本学が発行した『「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」の捉え方（内部資料）』において各教科が示した教科固有の思考力を、中教審総則・評価特別部会が示した「各教科等ならではの思考の枠組み」のキーワードを対応させて整合させることを第一の目的とする。さらに、「各教科等ならではの思考の枠組み」を働かせて育成する資質・能力の具体について、教育内容・指導法・評価方法を示すことを第二の目的とする。

【特色】

次期学習指導要領は教科の本質を踏まえた教科固有のものの見方・考え方を重視する一方で、教科横断的な問題解決の能力の育成を目指すものになると推測される。

本プロジェクトは、本学の教科教育を専門とする教員が協働して、教科固有のものの見方・考え方の検討を基礎研究としつつ、教科横断的な問題解決の能力を育成するための教育内容・指導法・評価方法を一体として提案する実践的研究である。全ての教科について教科教育担当教員を擁した、本学ならではの研究であり、他の教育大学・学部を先導する研究として特徴付けることができる。

【意義】

次期小学校学習指導要領は、平成29年度に告示され30年度から移行期間に入るものと推察される。この学習指導要領では、従来の学習指導要領には見られない、教科横断的な視点が前面に出るものと推察される。教科教育を担当する教員が次期学習指導要領を想定し、一

丸となって学校現場の授業改善や学部授業改善につながるよう、時代を先取りする本研究の意義は大きい。

【期待される成果等】

- ① 教科教育の担当教員が教科固有の見方・考え方を教科横断的に捉えられるようになる。
- ② 「各教科の指導法」のそれぞれの授業において、教科固有の見方・考え方とともに他教科に共通する見方・考え方を指導できるようになる。
- ③ 平成30年度からと考えられる次期小学校学習指導要領の移行措置において、附属学校や地域の学校へ対して、教科固有の見方・考え方とともに他教科に共通する見方・考え方の観点から指導・助言ができる。
- ④ 今後想定される学部の教育課程の改革において、教育の現代的課題へ対応できるカリキュラムの提案ができる。

研究プロジェクトの成果

平成28年度の研究実践としては、

- ① 各教科における見方・考え方について教科ごとに検討し、意見交換を重ねながら、各教科の見方・考え方の理解を深めた。28年度中に7回の研究会を持ち、すべての教科についての発表を行い、他教科からの見方・考え方も含め、検討を行った。
- ② 同時に、各教科で育成する資質・能力を『「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」の捉え方（内部資料）』から抽出・再検討を加えて、各教科で育成する資質・能力を整理した。
- ③ 各教科における見方・考え方を他教科にどのように働かせると、教科横断的に資質・能力を育成できるのかについて構造図を作成した。

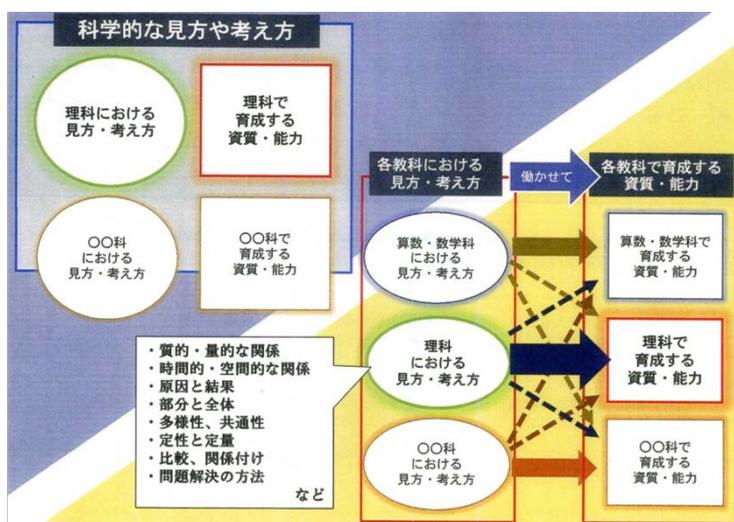


図 科学的な見方や考え方を例にした理科と算数・数学・他教科を関係づけて資質・能力を育成する考え方のイメージ

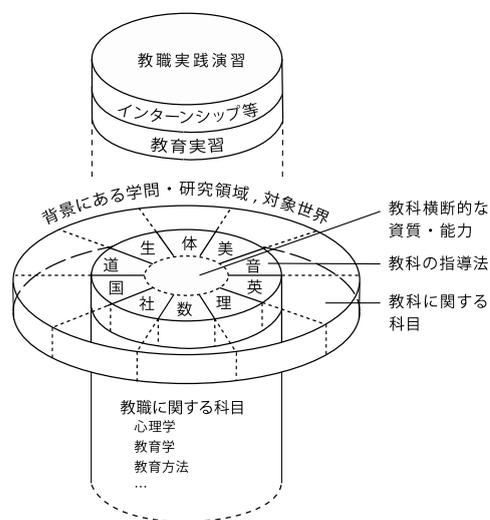
平成29年度は、プロジェクト分担者を3つのグループに分け、グループごとに研究を進めた。その3つとは、①「教科横断的教材開発研究グループ」②「教科横断的理論・歴史研究グループ」③「教科教育学方法論研究グループ」である。

①「教科横断的教材開発研究グループ」では、本学の特色になり得る「雪」をテーマに、各教科における見方・考え方を働かせ、各教科で育成する資質・能力を育成するための教材開発を行ってきた。そこでは、学生や教師が自分で教科横断的教材を開発できる能力を身につけることが目指された。

②「教科横断的理論・歴史研究グループ」では、1949年に発行された上越市の大町中学校のカリキュラムをもとに、教科横断的理論と、歴史的意義について研究を行った。

③「教科教育学方法論研究グループ」では、現代的課題のプログラミング、アクティブ・ラーニング、カリキュラム・マネジメントなどを教科横断的にとらえ、教員養成でどのようにカリキュラムとして構築していくかという研究に取り組んだ。

以上、3つのグループによる研究は、今後大学全体として、そしてすべての教員養成のカリキュラムがどうなっていくかという大きなテーマに関わるものであり、各グループの研究を総合的にまとめながら、今後も研究を続けていく必要性和、改訂された学習指導要領に適応するための新たな研究の必要性を共通認識しているところである。



教員養成カリキュラムの構造

研究成果の発表状況

『「思考力」を育てる -上越教育大学からの提言1-』 上越教育大学出版会 2017.6

『「実践力」を育てる -上越教育大学からの提言2-』 上越教育大学出版会 2017.12

「『思考力』が育つ教員養成 -上越教育大学からの提言3-」 上越教育大学出版会 2018.1

「『実践力』が育つ教員養成 -上越教育大学からの提言4-」 上越教育大学出版会 2018.2

学校現場や授業への研究成果の還元について

本学附属小・中学校の研究会において、本プロジェクトの分担者の殆どが指導者・助言者として関わり、各教科における見方・考え方と教科横断的な考え方・教育内容について述べている。また、公立の小・中学校においても同様な発信を行い、教育現場に研究成果の還元を行ってきた。

大学の授業に関しては、平成 30 年度以降、学習指導要領の改訂に伴い、各教科指導法の授業を中心に本プロジェクト研究の成果が還元されるのは明らかである。